

遺跡、古環境から見た古津／幡山古墳の時代

展示解説パンフレット

【開催趣旨】

新潟県最大の古墳である古津八幡山古墳は、直径 60m の円墳（丸い古墳）です。発掘調査の結果、西暦 400 年（古墳時代中期初頭）頃に造られたと考えられます。

古津八幡山古墳が位置する丘陵西側には国内最大級の規模を誇る越後平野が広がります。越後平野は海岸に形成された巨大な砂丘により、砂丘内側には広大な湿地、潟湖が形成され、大小の河川が網の目のように流れていました。広大な水田が広がる現在の越後平野の地形や景観は、江戸時代以降の放水路の開削や潟湖の干拓などにより徐々に形成されたもので、古墳時代の景観とは異なります。

人がある場所で営みをもつ背景にはさまざまな要因がありますが、周辺の環境は重要な要素のひとつといえるでしょう。河川はどこを通っていたのか、河口はどこにあったのか、周辺はどんな環境で、植生・生態系はどうだったのか、気候はどうだったのか、自然災害はあったのかなど、当時の古環境を知るとは集落や古墳、さらには古墳時代の社会を考えていくうえで不可欠な要素です。

今回の企画展では、地質学による越後平野の古環境の復元案をもとに、古津八幡山古墳がつくられた古墳時代中期を中心とする遺跡や古墳について見ていきます。

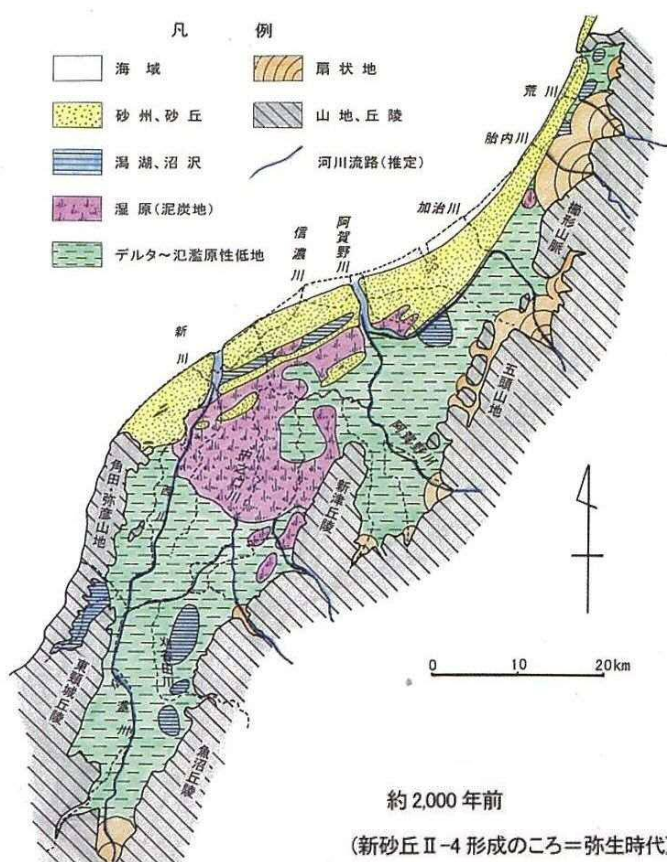
【古墳時代における越後平野の古環境】

越後平野の古環境についての研究は、主にボーリング調査で得られた地層の分析によって行われています。有機物があれば炭素年代測定によってその地層の年代が分かるため、その年代にはそこがどのような環境であったのかをある程度推定することができます。

また、遺跡の発掘調査においても、出土遺物や地層、自然科学分析などから、ある時代の周辺の微地形や自然環境について復元が試みられています。

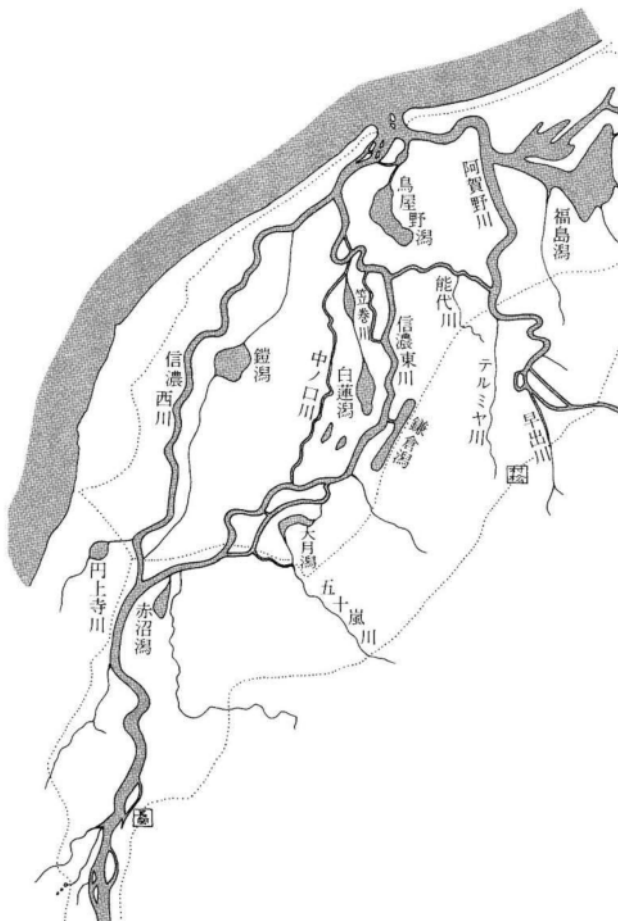
地質学の研究成果によれば、古墳時代において信濃川の河口や流路は現在とは大きく異なっていたと考えられます。ボーリング調査や遺跡の分布、江戸時代の絵図などから、約 2000 年前の弥生時代後期には信濃川本流が現在の西川（江戸時代の絵図には信濃西川と記載）を流れ、新川付近で日本海に注いでいたと考えられています。

古津八幡山古墳がつくられた約1600年前の古墳時代中期の越後平野の古環境については不明

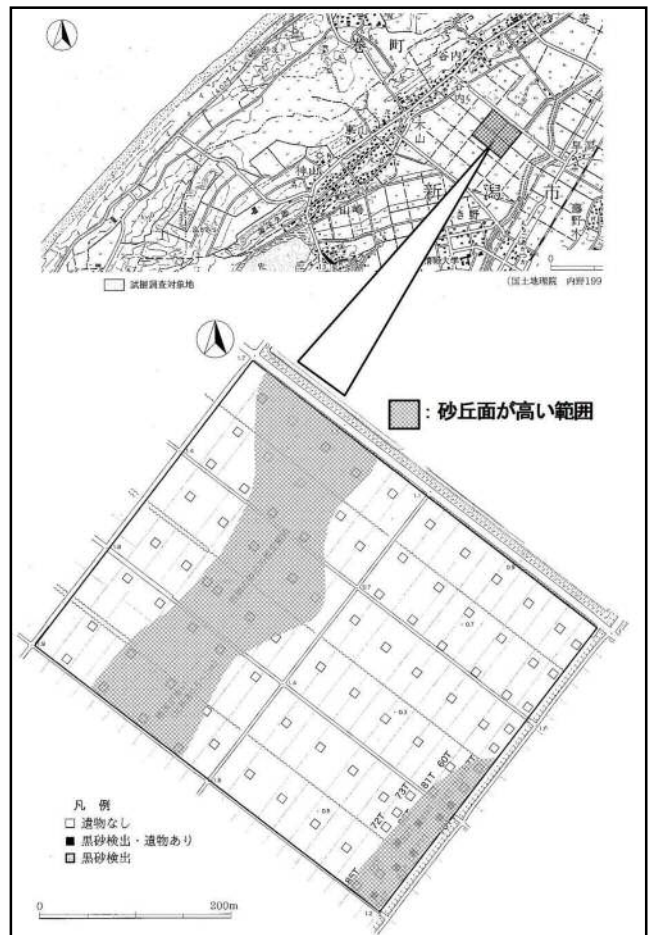


約 2000 年前の越後平野復元図

(国土交通省北陸地方整備局ほか 2012『新潟県内液状化しやすさマップ』を一部改変)



正保4(1647)年国絵図復元図
(榎根勇 1985『越後平野の1,000年』新潟日報事業社)



四十石遺跡周辺の砂丘の高低
(新潟市教育委員会 2012『四十石遺跡第2次調査』を一
部改変)

な点が多くあり、今後の検討課題といえますが、弥生時代と似たような状況であったと推測されます。

なお、信濃川（信濃西川）の河口はその後北東へ移動していきます。移動の年代については諸説ありますが、絵図などから、少なくとも江戸時代には現在とほぼ同じ位置に移動したことが分かります。

また、阿賀野川の河口については、弥生時代は現在とほぼ同じ位置であったと考えられています。古墳時代にも似たような状況であったと推測され、信濃川とは砂丘間凹地などの河川でつながっていたと推測されます。

古墳時代の信濃川河口推定地近くに位置する四十石遺跡（西区）は標高－1.1m以下の埋没砂丘に立地します。集落の西側は地形が落ちこみ砂丘間凹地となることが確認されています。

落ち際には平安時代の倉庫群が検出されており、また平安時代の「津」と書かれた墨書土器が2点出土していることから、古代には周辺に港が存在していたと推測されます。

四十石遺跡では古墳時代にも集落が存在していました。古墳時代の前期後半から中期初頭にかけて、近畿地方や加賀地域などの北陸南西部で多く出土するいわゆる「布留甕」を模倣した甕（「布留系の甕」）が少なくとも 15 個体以上出土しています。



県内で1遺跡における布留系の甕の出土数としては例外的に多く、信濃川河口近くに立地する本遺跡の特徴と考えられるとともに、古墳時代にも港のような機能があったことを示唆します。



【古津八幡山古墳以前の越後平野の古墳】

古津八幡山古墳がつくられる前の古墳時代前期、越後平野ではそれまでの弥生時代のお墓よりも規模の大きなお墓（古墳）が各地域の豪族によってつくられるようになります。

古墳時代前期に古墳がつくられた越後平野の主な地域としては、城の山古墳（胎内市）などがある旧清水潟北東域、緒立八幡宮古墳（西区）がある信濃川と阿賀野川水系の合流域、山谷古墳・菖蒲塚古墳（西蒲区）などの角田山麓周辺域、大久保古墳群（長岡市）などの島崎川周辺域、保内三王山古墳群（三条市）などの東山丘陵中央部域（加茂市～三条市）、麻生田古墳群などの東山丘陵南部域（見附市～長岡市）などがあります。

なお、北区の松影D遺跡では砂の高まりが削平された際に底部穿孔の赤く塗られた壺が採集されており、古墳時代前期の古墳である可能性が指摘されています。

さて、古墳時代前期の日本海側における古墳の分布をみると、現状で山形県の庄内平野にある鷺畑山2号墳（1辺20mほどの方墳）が北限です。また、角田山麓の山谷古墳、菖蒲塚古墳はそれぞれ日本海側における前方後方墳、前方後円墳の分布の北限になっています。



東南北部・新潟県北部の主な古墳時代前期～中期初頭の古墳

（新潟市文化財センター2013『弥生の丘展示館ガイドブックNo.3

（古墳・奈良・平安時代編）』に追加・一部改変）

【古墳時代の続縄文土器】

越後平野は弥生時代の終わり頃から古墳時代前期にかけて、北海道に起源をもつ「続縄文土器」という土器が分布する日本海側の最南端に位置しています。

該当する遺跡は、現状で角田山麓の御井戸B遺跡・南赤坂遺跡（西蒲区）と、福島潟周辺の椋C遺跡・正尺A遺跡・葛塚遺跡（北区）、腰廻遺跡（阿賀野市）の6遺跡で、分布は角田山麓と福島潟周辺に限られます。

角田山麓は日本海側における前方後方墳、前方後円墳の分布の北限にあたり、古くから有力な豪族が存在していたと考えられます。玉や鉄など西方の物や情報を求め、北方から人が日本海を經由して角田山麓にやって来たと推測されます。なお、菖蒲塚古墳（西蒲区）の西方約500mに位置する南赤坂遺跡では、続縄文土器のほかに、地元の土器と続縄文土



古墳時代における続縄文土器と主な古墳の分布

（新潟市文化財センター2013『弥生の丘展示館ガイドブックNo.3（古墳・奈良・平安時代編）』を一部改変）

器との折衷土器や皮なめしに使用したと推測される石器などが出土しており、北方人の居留地であった可能性が指摘されています。

また、続縄文土器の分布からは福島潟周辺も物や情報が集積する地域であったと考えられます。北区の松影D遺跡は古墳の可能性が高く、阿賀野川水系の要所である福島潟周辺にも有力な豪族が存在していたことが推測されます。

【古墳時代中期の越後平野の古墳】

古津八幡山古墳がつくられた西暦 400 年（古墳時代中期初頭）頃、越後平野の社会には大きな変化が起こったと考えられます。古墳時代前期に越後平野で各地の豪族によって丘陵や台地上にたくさんつくられた古墳は、古墳時代中期になると激減します。一方、古墳時代中期になると魚沼地域や頸城地域で古墳が出現したり増加したりします。越後平野における古墳時代中期の古墳は、現時点で古津八幡山古墳と、その次の世代頃と推測される東区の牡丹山諏訪神社古墳の 2 基に限られます。

古津八幡山古墳は阿賀野川から会津へと至る要所に位置します。古墳時代前期に越後平野の各地域で古墳をつくっていた豪族たちが、5 世紀になり、それまでの地域を越えて共同して推し立てた豪族、すなわち共立王であった可能性が考えられています。

また、牡丹山諏訪神社古墳はその立地から阿賀野川と信濃川とが合流する良好な港を押さえた豪族のお墓と推測されます。県内初の円筒埴輪や古い須恵器といった出土品は、その立地や被葬者像を反映していると考えられます。ちなみに古墳時代前期になりますが、西区の緒立八幡宮古墳は墳丘に葦石が敷かれています。葦石を敷いた古墳は県内では珍しく、牡丹山諏訪神社古墳と共通した様相とも捉えられます。

なお、古墳時代中期には越後平野において他地域との関係にも変化が見られます。古墳時代前期に比べて群馬や長野など東山道方面からの影響が強くなるのが出土遺物からうかがえ、この時期の魚沼地域や頸城地域での古墳の盛行と関連した状況と捉えられます。



古墳時代における続縄文土器出土遺跡及び越後平野における古墳時代前・中期の主要古墳・遺跡

(「正保越後絵図」(新潟県立図書館所蔵)に古墳・遺跡の推定位置を追加)

【古墳時代中期の越後平野の集落】

越後平野の集落においても古墳時代中期を境に途絶えたり断絶したりする事例が多く見られます。一方、各地の拠点的な集落は中期まで継続したり、あるいは古津八幡山古墳の被葬者の屋敷地の可能性がある舟戸遺跡のように古墳時代中期になると遺物量が増加する集落も認められます。

越後平野における古墳時代中期の主な集落としては、秋葉区の舟戸遺跡・沖ノ羽遺跡・中田遺跡、西蒲区の御井戸B遺跡、西区の四十石遺跡、北区の葛塚遺跡、聖籠町の二本松東山遺跡・山三賀Ⅱ遺跡、新発田市の曽根遺跡、阿賀野市の腰廻遺跡、胎内市の天野遺跡などがあります。

牡丹山諏訪神社古墳周辺では古墳時代中期の遺跡は未発見ですが、西に約 800m離れた同じ砂丘列上には、古墳時代前期の土器が少量見つかっている山木戸遺跡があります。

【おわりに】

越後平野の古環境については、日進月歩で解明が進められています。しかし、より細かい時間幅で特定の時代や場所の古地形を復元するにはまだデータが不足しており、不明な点が多いのが現状です。また、ボーリング調査に比べてより細かい地域の地質情報が得られる考古学の発掘調査成果との突きあわせも今後の課題といえます。

古墳時代前期と中期の間の変化は、内容やその大小は別として、越後平野に限らず日本列島の広範囲で見られます。当時、豪族間のネットワークによって、情報が列島各地である程度共有されていたことを示唆しています。古墳時代中期に、越後平野において古墳や遺跡が減少する背景については、ヤマト勢力との関係、気候の寒冷化、自然災害など諸説あり、あるいはそれらが複合している可能性がありますますが明らかではありません。今後はその要因について、当時の古環境なども含め、さまざまな面から検討を進めていく必要があります。

なお、今回の企画展では鴨井幸彦氏の協力により防災・減災関係の展示も行いました。住んでいる土地の地形や地盤の特徴、その成り立ちを知ることは、災害への備えとして重要なことです。

遺跡の発掘調査では地震や津波、火災など、過去の災害の痕跡が見つかることがあります。近年、大学や研究機関などを中心として、全国の過去の自然災害の情報をデータマップ化し、将来の防災・減災に役立てようとする動きが進められています。遺跡の調査記録は細かい地域で詳細な情報が得られることから、各地の防災や減災に活用されることが期待されています。

お知らせ



三条地震（1828年）の液状化によると推測されている噴砂（秋葉区大沢谷内遺跡）

文化財センター学芸員による展示解説

日時 2016年10月16日(日)13:30～15:30
申込み 不要(直接、弥生の丘展示会場へお越しください)

関連講演会

越後平野はどうしてできたか ー古墳時代の越後平野を推理するー

内容 地質学などの最新の調査・研究成果をもとに、古墳時代の越後平野の古環境についてご講演頂きます。また、防災・減災のヒントなどについても解説して頂きます。

日時 2016年10月23日(日)13:30～15:30

講師 鴨井 幸彦氏(地質技術者)

会場 新潟市文化財センター研修室
(展示会場とは異なります)

定員 80名

申込み 不要(直接、文化財センターへお越しください)